

---

# アーマードコア 傷だらけの戦士

澄田 康美

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アーマードコア 傷だらけの戦士

### 【Nコード】

N7136N

### 【作者名】

澄田 康美

### 【あらすじ】

前書き

特攻兵器が襲来後、人々はただ生き残る為に戦った。その戦いの先に、未来はあるのか？ネクススからラストレインまでの半年間の世界を舞台に、独立武装勢力に所属する一人のMTパイロットの視点で語られるアーマードコアのアナザー・ストーリー！！

## プロローグ（前書き）

### 諸注意

作者はこのような話を書くのが初めてです。

ですので、明らかにおかしいと思う所もあると思いますが、まあお手柔らかにお願いします。

## プロローグ

### プロローグ

ミラージユ、クレスト、キサラギ、更には新資源を発見した事によって発足した、新企業ナービス。

その4社の大規模な企業戦争は、予想もしない形で幕を閉じた。

突如現れた特攻兵器の襲来によって、企業や人類は壊滅的被害を受けたんだ。

一時は滅亡の恐れすらあった人類だったが、特攻兵器の襲来はこれまた突然やんで、人々はどうにか滅亡を免れた。

だが、滅亡を免れた人類は、生き残る為にまたもや争いを始めていった。

秩序の崩壊した世界で、俺達はただ戦い続ける。明日を生き残る為に・・・己が生き残る為に・・・

### キャラクタープロフィール

主人公の名前 レイ・アルナス

性別 男

詳細設定・・・

独立武装勢力クロウの一員。この中では最も新米だが、特攻兵器襲来を生き残っただけあってその実力はお墨付きである。慎重かつ冷静な性格。この中で唯一ミラージユ製の飛行変形MTに搭乗している。

搭乗機 MT10-BAT

名前 エル・ライリー

性別 男

詳細設定・・・

独立武装勢力クロウの一員。レイと同じ時期にパイロットになり、年も近いからカレイのパートナーに回る事が多い。陽気で明るく、全員のムードメーカー的存在。クレスト製の四脚拠点防衛タイプのMTに搭乗しており、割と強引に戦う。

搭乗機 CR-MT98G

名前 イーグル・アバロン

性別 男

詳細設定・・・

独立武装勢力クロウの隊長。特攻兵器の来襲によって、大半の部下と自身の左目を失った。わかりやすい程の親方タイプで、自然と部隊を纏め上げている。クレスト製の二脚ホバータイプのMTに搭乗しており、慣れた動きで常に先陣を切る。

搭乗機 CR-MT85BかCR-MT85M

名前 ペイル・エスト

性別 男

詳細設定・・・

独立武装勢力クロウの一員。隊長のイーグルと共にこの武装勢力を立ち上げた。気苦労の多い性格で、後始末等に奮闘する事がよくある。クレスト製のスナイパータイプのMTに搭乗しており、その射撃は正確無比。

搭乗機 CR-MT83RS

名前 ガク・キリシマ

性別 男

詳細設定・・・

元レイブンスアーク所属のレイブン。崩壊したレイブンスアークを抜け、今はイーグルの率いる武装勢力に身を寄せている。寡黙で多くを語らない。隊長のイーグルとは旧知の仲である。レイブンである以上、唯一ACに搭乗しており、ベテランとして戦場でその力を奮っている

搭乗機 御神火（AC）

名前 リン・メイラ

性別 女

詳細設定・・・

独立武装勢力クロウの一員。この中で唯一の女性。現地では指示を出したりもするオペレーターの存在。穏やかな性格で、部隊の誰からも好かれている。輸送ヘリに搭乗しており、操縦技術はかなりの物である。ただし操縦はかなり荒い。

搭乗機 クランウェル等へり全般

名前 ポール・ミンス

性別 男

詳細設定

独立武装勢力クロウの一員。ただしパイロットではなく整備兵として所属している。それでも整備兵のチーフなので、それなりにしっかりしている。しかし頼りない印象が目立つ。レイやエルとは年が近いので仲がいい。

搭乗機 なし

## ミッション1 狩りの時間

ここはルガ峡谷の適当な所。

ここで俺ことレイ・アルナスは、崖の上の方でいつものように見張りをやらされていた。見張りには新米の仕事だと相場が決まってるそうだ。

まあ、俺の機体はミラージュ製のMT10-BATだから、いざ見つけられた時は下手なMTより都合がいいんだろうな。

しかし・・・こうずつと見張りつてのもつまらないものだ・・・そうだ、下の方で俺と同じように見張りをしているエル・ライリーとちよつと話でもするか。

そう決めた俺は、さっきまで狭いコクピットで寝そべっていた体勢から、上半身だけ起こして無線の周波数を合わせた。感度はよくないが、どうやらエルに繋がったみたいだ。

「おいエル、そっちはどうだ？こっちは蚊の一匹も見当たらない。ここまで暇だとどうにかなっちまいそうだ。」

蚊つてのは、俺達の間で通っているガードメカとかの事だ。俺の適当な一言に、エルが俺と同じ調子で返してきた。

「こつちも同じだレイ。ひよこもゴリラもいねえぜ。これじゃ今日も水だけだぜ。」

ひよこつてのは、逆間接のMT、ゴリラはこつい二脚MTの事だ。その返答に、俺は少し皮肉を込めて返した。

「そうか。俺はともかく、お前の蜘蛛は水だけじゃ足りないだろうからな。」

この場合の水つてのは、所謂ENとかに使われる燃料の事だ。蜘蛛つてのはCR-MT98Gの愛称だ。

俺の蝙蝠（機体の愛称）はレーザーとかがあるからいいが、あいつの機体は実弾のみだ。さすがに弾薬とかがないと困るだろうな。俺のそんな皮肉にエルは、

「てやんでい、俺っちの肉食の蜘蛛は、お前さんの血を吸う蝙蝠と訳が違うんだよ。」

と更に皮肉を込めて返してきた。声からはふてくされた感じがあった。

まあ確かにそうだ。このままじゃあいつだけじゃなく、俺だってジリ貧もいい所だろうな。

かといって他の場所に行ってもいるとは限らない。だったら、比較的通り道になりやすいこのルガ峡谷で見張ってる方がまだ確実だろう。

今にもしびれの切れそうな時に、エルがいきなり叫んできやがった。

「おいおいおいおい！！！！ありや間違いねえ！！！！ようやくおいでなすったぜ！！！！」

耳がキーンとなるほどの大声に、俺は軽い怒りをぶつけるついでに尋ねた。

「おいエル！！無線繋いでる時にがなり声はやめろ！！それで、連中ってなんだ！？」

そう尋ねると、エルが声のボリュームをほとんど下げずに返してきた。

「訊けよおい！！腕のないひよこが三匹に、黒いゴリラが一匹！！そばにいるのは餌持った働き蟻だ！！」

腕のないひよこ・・・MT08ME-OSTRICHの事か。で、黒いゴリラはMT09-OWLだな。そんでもって働き蟻が78式装甲輸送車か。

俺は働き蟻の数が気になったので、エルに尋ね返した。

「エル。働き蟻は何匹だ？」

「そうだな、三匹ぐらいだ。あれだけあつたら、キリギリスがいても冬が越せるぜ。」

なるほど、どうやら結構な物資を積んでるみたいだな。

まあいくら何でもすぐつてのはまずいだろうから、俺は冷静にエルに言ってやった。

「エル、見つけたからって先走るんじゃないぞ。いくらナイトが貧弱でも、4対1じゃさすがにきついだろ？」

と忠告すると、さすがのエルもそれぐらいはわかっていたようだ。

「おいおい、そりゃ俺っちでもわかるつての。」

「じゃあ、今から俺が行くから、ばれないぐらいの距離を維持してくれ。」

「わかってらあ。任せろ！！」

と自身たつぷりな調子で言ってきた。こういう時のエルは正直不安だ。

まあそんなにすぐとちらないとは思わないが、急いだ方がいいな。そう覚った俺は、機体のシステムをすぐさま戦闘モードに切り替えて、エルのいる元へ文字通り一直線に飛んでいった。

エルの元に行きながら、俺はエルいつもの打ち合わせをした。

「エル、わかってると思うが、今回は蟻もいるんだ。なるべく丁寧にやってくれよ。」

「おおよ、俺っちの腕を見せてやらあ！！」

気合の入った言葉は頼りになると同時に、それとなく不安もある。こいつとの付き合いは長いからよくわかるんだ。

とりあえず、俺がしっかりとサポートするか。

少しして、俺はようやく現地に到着した。

エルが待ちわびた様子で、俺に言ってきた。

「遅いぜレイ、これじゃあいつら巢に帰っちまう所じゃねえか。」

「無茶を言つな。お前との距離が結構あつたんだ。」

「まあそんな事をぐちぐち言つても仕方ねえか。それじゃ、始めるぜ！！」

そう言つて、レイが蜘蛛のグレネードキャノンを、連中のいる場所のやや上を狙い始めた。

「まずは出口を塞ぐぜ！！」

グレネードキャノンが放たれ、あいつらのいる場所よりやや上にある崖に当たった。

当たった崖は轟音と共に崩れていき、下にいるあいつらの道を文字通り塞ぐように落ちていった。

「どうよ！！俺っちのあざやかな射撃技術を！！」

まあいつもやってる事だから、うまくいって当然なんだがな。

そんな事を言ってもこいつはどうせ聞かないだろうから、俺はいつも通り上から仕掛けに行った。

ミサイルは使えないから、ここはレーザーキャノンでやるか。

まずは一発。慌てふためいていたひよこ一匹を仕留めてやった。戸惑っている敵つてのは、本当にやりやすいもんだ。

俺の攻撃に、他のひよこことゴリラが必死に反撃してきた。もちろんこれは予想通りだ。

飛び交う攻撃を俺は避け続け、その間にエルがグレネードの次弾を発射した。運良くゴリラに命中だ。

後はもうひよこだけだ。ここは俺がパルスを使って二匹を一気に仕留めた。

いよいよ働き蟻の餌をいただく時だ。ナイトのいなくなった蟻は、素直に従った。

さて、そろそろリン・メイラに連絡するでしょう。

俺は無線の周波数を合わせて、リンに連絡をした。

「リン、今日は働き蟻の餌が3つ程手に入った。輸送用のへりを頼む。」

その連絡に、リンはわかりやすく喜んだ。

「本当？よかったわね。これでやっとまともな食事が出来るじゃない

い。それじゃすぐにでも行くわね。」

そう言つて、ぶつと連絡を切った。嬉しさのあまりすぐに無線を切っちまったみたいだ。

まあ、確かにな。これでエルの蜘蛛もやつと飯にありつけるんだ。その喜びが、俺の無線からやつぱり聞こえてきた。

「やったぜえ・・・やつとこいつにちゃんとした飯を食わせれるぜ・・・今までずっと水でごめんなあ、この後で腹いっぱい食わしてやるからよお。」

・・・まったく、聞いているこつちが恥ずかしくなってくる。確かにあいつの蜘蛛は整備もろくに出来てなかったから、正直ガタが来てたからな。心配になるのもわかる。

俺もこれで一安心だ。こいつはそこまで整備はいらないが、それでも整備ができるってのは違うからな。

せつかくだから、待ってる間に煙草の一本でも・・・ってもう来たか。相変わらずリンは来るのが早い。こんな峡谷をよくあんなスピードで飛べるなと毎回感心する。

そして無線から、リンの連絡が来た。

「それじゃ、レイもエルもまとめて運んで行くからね。」

そう言つてリンのヘリは俺達のいる場所にゆつくりと降りてきた。

俺達全員の輸送も、クランウェルなら十分可能だな。

俺とエルの機体と働き蟻の餌を持って、クランウェルはルガ峡谷を後にした。

俺は蝙蝠の中で、煙草を吸うのを止めて寝そべった。ああ、やつとゆつくり寝れそうだ。

まどろむ意識の中で、今でも綺麗な夕日が俺の目に入ってきた。

さて・・・明日はどんなだろうな・・・  
そんな心配をしても仕方ないと思った俺は、  
すぐに眠りについた。

## ミッション1 狩りの時間（後書き）

後書き

みなさんこんにちわ。この前まで幻想入りを書いていた澄田です。  
あ、じゃなくて今でも書いている澄田です。

今回は以前までと違ってガチガチの戦争物です。アーマードコア大  
好きです。

バクテリアがガンダムの奴書いているので、わしはじゃあACの奴  
書いてみようかなって事でこうなりました。

以前書いていた幻想入りと違って、これはクロスオーバーなどはま  
ったくなしです。どこかの世界に入るとかもありません。

まあ幻想入りも見てくれている人は、これはこれで違った物と思っ  
て見てくれていればいいと思っています。

これからもオリキャラがどんどん出てきます。ので原作キャラはあ  
んまり出ません。せいぜいタブに書いた奴程度です。

MTの詳細がわからない人はぐぐってくださいな。

では、ミッション2をお楽しみに。

## ミッション2　ひと時の休息

### ミッション2　ひと時の休息

蝙蝠の中で眠りに落ちた俺が起きた時、いや、起こされた時にはもう俺達の基地についたみたいだ。

コクピットを開けて俺を起こしに来たのは、整備兵のポール・ミンスだ。

「レイ、またコクピットで寝てたんだね。ここってそんなに寝心地いいもんなの？」

少しの皮肉を込めて、ポールは俺に言ってきた。

「そうだな、下手なソファーよりは寝やすい。」

ポールみたいな整備兵は、ちよくちよくソファで寝ている事が多いので、ポールからすれば俺の言った事は皮肉にしか聞こえないだろう。

俺がコクピットから出た後、ポールは軽いため息と呆れた様子を見せた後で、

「あつそ、それだったら整備が終わった後に、僕がここで寝てていい？」

と言ってきたので、俺は当然、

「ここは俺の指定席だ。悪いが誰にも乗せる気はない。」

と言い返してやった。

俺にだってプライドはある。愛機に自分以外の奴が乗ってるのは気に入らない。

まあ整備の一環としてとかならいいが、ベッド代わりにされるのはさすがに虫唾が走る。

コクピットから出て、俺はイーグル・アバロン隊長に報告しようとするなりに長い通路を歩いていった。

歩いている時に、後ろからエルが俺に駆け寄ってきた。

さっきの成果があつてか、随分と上機嫌だ。

「おいレイ、お前さんやつとこさ起きたみたいだな。俺っちがポールの整備に付き合ってる間にも、お前ずつとコクピットにいたのか？」

と言われて、俺はどれぐらい寝ていたのか何となく察した。

エルの機体の整備が終わってから俺の機体の整備に来たって事は・

・およそ2時間程度寝ていた訳だな。

まあ隊長への報告は遅れていようが問題はないから、俺はさほど気にせずに、

「そうだ。」

と一言で返した。

しかし、エルは一言で返しても十ぐらいで返してくるような奴である。

「まあそれは俺にとつちやどうでもいい事だな。それより聞いてくれよ、あの働き蟻が持ってた餌の中に、なんと俺っちの蜘蛛のスペアが入ってたんだ！！もう当分はあいつに無理させずにすむぜ！！

もちろん弾薬とかもばっちり入っててな・・・」

とエルが話す中で、俺はふとある事を考えていた。

あの特攻兵器襲来の後で、世界がぼろぼろになった今、俺達人間はなぜ未だに戦っているんだろうな・・・

まあそんな疑問は抱くだけ無駄だ。俺達は戦う事でしか明日を見つけれない。

恐らく俺は・・・戦士と言える中でも異端なんだろうな・・・こんな事を考えるぐらいなんだから・・・

「・・・イ、おいレイ！！聞いてんのかおい！？」

「あ、ああ。」

エルのがなる声で、俺はどうにか現実へと戻ってきた。

エルのこの様子から察するに、俺は結構ばーっとしていたみたいだ。

「たく、俺っちのこれからの将来設計を、お前はまったく聞いてなかったのかよ。」

将来設計？こいつの口からそんな事を聞けるとは思いもしなかったな。

「俺達に将来設計なんかいるのか？明日死ぬかもしれない日々だつてのに。」

「だからこそ将来設計じゃねえか。わかれよレイ。」

やれやれ、この様子じゃ、下手な事を言っても面倒だな  
とりあえず俺は、エルをなだめる事にした。

「わかったわかった、俺はともかく、お前には将来設計がある訳だな。」

「そうだよ、お前さんと違って、輝ける未来がある訳だ。例えばこれ！！」

と言って見せてきたのは、こいつが俺といるときにしょっちゅう見せてくる写真だ。

その写真つてのは、こいつとこいつの恋人が一緒に移っている写真だ。

こんな話をしてくる奴は大抵すぐ死ぬんだが、こいつはその定石を無視し続けて既に半年は戦ってきたらしい。

「どうだレイ、俺にはこの美しい未来がある。だからこそ、俺には将来設計が必要なんだ。お前さんにはないのか？こういう輝ける未来つてのは？」

輝ける未来・・・か。俺みたいな奴が、そんな大層な物を望むべきなのか・・・正直俺にはそんな未来なぞない。

だが俺はもちろん戦場で朽ち果てる気もない。俺はこの戦いを絶対に生き抜いてやる。

そう考えた俺は、エルにこう言ってやった。

「悪いが、俺はそんな未来よりも、明日をどうするかで頭が一杯なんだ。エルみたいな余裕も幸せもないよ。」

そう言うってから、さすがのエルも口を閉じた

長い通路を歩いて、俺達はようやく隊長にいる部屋の前についた。ドアをノックし、俺達は隊長のいる部屋へと入った。

「失礼します。レイ・アルナス及びエル・ライリーが戦果報告に来ました。」

と顔に新聞的な物を当てて、椅子で寝ている隊長に俺は一応姿勢を正して言った。

俺の声が聞こえたのか、隊長は顔に置いてあった新聞的な物を外して、俺達の方を見てきた。

「ああ・・・レイとエルか・・・」

寝ぼけた様子から察するに、どうやら隊長はガチで寝ていたようだ。そんな様子でも、俺はとりあえず報告を続けた。

「隊長、今日の我々の戦果は・・・」

と言おうとした時に、エルがいきなり前に出てきた。

「隊長！！聞いてくださいよ！！今日は俺達、あのルガ峡谷でなんと働き蟻を三匹も捕まえたんすよ！！」

と礼儀もへったくれもない報告に、隊長は、

「何い？あのルガ峡谷でか？」

と若干目を覚ました様子で返してきた。

「そうっすよ！！やっぱり隊長の先見眼は大したもんっす！！」

と感心した様子で言った。

まあルガ峡谷は色んな奴の通り道である以上、来てもさほど不思議でもないんだがな。

隊長もそれぐらいはわかっているようだ。

「先見も何もねえよ。あそこなら見張ってたらか何か通ってもおかしくはないだろ。まあ最近はあるまりだったから、それはありがたい報告だな。」

その通りだ。事実今日の収穫がなかったら、俺達は結構危なかったかもしれないんだ。

「とりあえず、首の皮は繋がったか。その調子でまた頑張ってくれや。俺やベイルも時々出るからな。」

と言われたので、俺達はとりあえず隊長の部屋を失礼して、自分の部屋へと歩いていった。

途中の道で俺達は、あのガク・キリシマさんとすれ違った。隊長とのよしみらしいが、俺を含めてあの人と喋った奴はあまりいない。エルですらろくに喋った事がないらしい。

「なあレイ、ガクさんってなんでこんな所にいるんだろうな。ガクさんはレイブン何だから、俺達みたいなのとつるむ必要もないと思うぜ。」

とエルが言ってきたので、俺はある事を思い出してエルに言っていた。

「レイブンスアークが崩壊したんだから、どこかに身を寄せてた方がガクさんは楽なんじゃないか？」

「ああ、そーいやそうだった。それでもガクさんなら一人で頑張れそうだと思うけどよお。」

「まあ、あの人の詮索をしてても仕方ないだろ。それじゃ、俺はもう部屋に戻るからな。」

丁度通路の別れる所に出たので、俺はエルに言った。

エルと俺の部屋は少し離れているので、ここでエルと分かれなければならぬからだ。

「おう、また後でな。」

と言って、エルは手を軽く振った後で自分の部屋へと歩いていった。俺も手を振り替えて、部屋へと戻っていった。

部屋へと戻り、俺はあまりきかない冷房を効かせて、寝心地のよくないベッドでごろんと横になった。

とりあえず、今日の戦いは終わった・・・そう再確認し、俺はふと時計に目をやった。

午後5時21分。夕食にはまだ早い・・・か。

戦いを終えた俺は、自然と腹が減っていた。まあ後一時間もすれば飯の時間になるだろう。

飯の時間になるまで、俺はベッドでただ待ち続けた。

こうしている内に、俺はさっきまで見張っていた時間を思い出して

いた。

さっきとは待っている物が違えど、こうしている時間ってのはどうしても暇で長い物だな。

そう思ってたただ待ち続けている内に、スピーカーから声がしてきた。しかし飯の時間にしては早くないか？

俺は少し嫌な予感を走らせた。そしてそれはどうやら当たったみたいだ。

「総員に告ぐ！！この基地に武装勢力と思える部隊が接近中！！武装勢力からは友好の意思は見受けられない！！恐らく武装勢力には交戦の意思があると思われる！！パイロットはただちに格納庫へと逃げ！！繰り返す！！パイロットはただちに格納庫へと逃げ！！」

リンの荒げた声は、どうやら今日の戦いが終えてない事を告げていたようだ。

俺はベッドから体を起こし、空腹の事も忘れて蝙蝠の元へと駆けて行った。俺が本当の休息を得る為に・・・明日を生き残る為に・・・

## ミッション2 ひと時の休息（後書き）

### 後書き

こんにちわ。初日だって事で張り切って2話投稿してみました。

割とありがちな展開だと思うんですけど、まあ多めに見てやってくださいな。

それにしても、幻想入りの方とは本当趣が違いますねえ。比べてて思いました。

まあこっちは完全にノリを変えてやっている訳ですから、それも当然なんですけどね。

あ、一つだけ連絡です。

この投稿は、不定期ですけど一応土曜日は定期的にやる予定ですので、それだけ覚えておいてくださいな。

さて、次回ではレイやエル以外の人の実力とかがわかる（予定）ですので、是非ともご期待ください。

では、ミッション3をお楽しみに。

### ミッション3 迎撃

長い廊下を走っていると、俺は途中でエルと合流した。

エルと一緒に走っていると、エルが走りながら俺に話しかけてきた。

「レイ、こんな穴倉を見つけるような奴がいるなんて、正直信じられねえよな。」

エルの言うとおり、俺もここが敵が何かに見つかるとは思ってもしなかった。

この基地は、文字通り峡谷に穴倉を掘り、そのまま地下に作ったといつても過言ではない程の単純構造である。

一応開閉式のヘリポートがあるものの、それも所詮は穴倉の中と言った具合だ。

なので、この基地を外部から知られると言つのはまずありえない事なんだ。

それでも、敵が来た以上は、俺達がどうにかするしかない。

しばらくして、俺達はようやく格納庫についた。格納庫はポールを含めて、整備兵が大忙しな状態であった。

緊急態勢という事で、格納庫は赤色のランプがくるくると回りながら、格納庫全体を照らしていた。

周りを見渡していると、隊長とペイル・エストさんとガクさんの三人が既に一箇所に集まっていた。

とりあえず、俺達もその場に駆けつけた。

駆けつけた所で、隊長が俺とエルが来た事に気づいたようだ。

「おう、レイにエルか。これから敵さんの詳細を言うから、よく聞

いておけよ。」

と言われ、俺達は姿勢を正して隊長の話を聞いた。

「まあ、かいつまんで説明するぞ。リンの話から聞くとだな、敵さんは基本的に腕無しひよこを中心とした部隊らしい。他には俺と同じ赤いゴリラが三機ほどで、蚊も結構いる。後、ここはもう既に敵さんに囲まれているらしい。」

隊長の話から、俺は敵の規模がどれほどの物なのかを判断した。恐らく敵は俺達以上の戦力を有している。その上ここは囲まれているときた。

状況的に言えば、恐らく最悪の状態であろう。だが、そんな状態でも隊長は話を続けた。

「だが、だからと言って俺達はここで退く訳にはいかねえ。いくら敵さんがいようと、俺達はここまで生き残ってきたんだ。悪運なら誰にも負けない俺達が、ここで死ぬ訳ねえ。ここは一つ、死神はあいつらの方に送りつけてやるとするぞ。いいな？」

隊長の呼びかけに、俺達全員は無言でうなずき、答えた。その様子に隊長は、

「よし、お前らならそう答えてくると思っていた。そんじゃ、行くぞ野郎共！！」

と全員を鼓舞するように手を掲げ、俺達も同じように掲げ、叫んだ。

「おう！！」

そして俺達は、自分の愛機へと搭乗していった。  
コクピットに乗り、俺は愛機の調子を確認した。

ジェネレータ及び、ラジエータに問題なし。駆動系も全てオールグリーンだ。

さっきの戦いから、この短時間の間にここまで整備するとは、相変わらずポール達の腕は大した物だ。

さて、さっきと違ってミサイルも十分にある。今回は一つ、派手にやるとするか。

俺は愛機の調子を確認し終え、隊長の無線連絡を聞いた。変わらず感度はよくないが、まあこれで十分だ。

「さて、敵さんはここを囲んでいるとはいえ、まだ距離を取っているらしい。ここは一つ、こっちが先手を打つとしよう。そこでだ、ルーキー、お前がまず、敵の蚊達をお得意のミサイルで叩き落としてこい。」

ルーキーってのは、一応俺の事である。俺も一端のパイロットだが、ここではまだ若いからこう言われている。正直俺はそれが気に入らない。

まあ隊長の指示である以上、俺はとりあえず言う事を聞くとしよう。とりあえず俺は、

「はい、わかりました。」

と隊長に返した。

隊長は聞いていたので、一応確認の一言を言ってきた。

「よし、じゃあまずはお前さんが戦闘機形態になって真っ先に出ろ。俺達はその後であいつらに攻撃する。一応言っておくが、蚊以外にはあまり手を出すなよ。」

と言われ、俺はすぐに出撃の準備をした。

ヘリが出撃する用のエレベータに乗り、俺はこれから行う事を頭の中で反芻していた。

エレベータが上がりきり、俺はいよいよ出撃の態勢を取った。

ランプが緑になったのを確認してから、俺は可変した状態で出撃した。

外にでた瞬間に、俺は真っ先に空へと飛び上がった。その後で、上空から敵の戦力を確認した。

リンの言っていた通り、ここは完全に囲まれているな。それに敵の戦力もかなりの物だ。これは一筋縄じゃ無理そうだな。

確認し切った後で、俺は次にターゲットである蚊に対してのロックオンを始めた。

よくもまあここまでつれてきたものだと感じながら、俺は蚊のロックオンを続けた。

10機程ロックオンした所で、俺はミサイルを発射した。

ミサイルは闇に紛れていき、程なくして蚊の群れを落としていった。上空からの攻撃なので、攻撃するまではばれなかったが、さすがに撃てば居場所はばれる。

しばらくして、今度は俺の方にミサイルやら何やらが大量に飛んできた。

俺は可変したままで飛び回り、ミサイルを谷にぶつけるなどしてかわしていった。

俺がかわし続けている内に、どうやら隊長達が動き始めたようだ。

敵がいると思える所に、種類の違う爆発がいくつもした。恐らくはエルのグレネードや敵の爆発が混ざってそうなっているのだろう。

遠くから見え辛いが、隊長やガクさんが敵陣を切り込むように荒らしているのも見えた。

こうなればもう敵がいくらいようが俺達に負けはない。隊長とガクさんの二人は流れを掴めば圧倒的だからだ。

敵がどんどんやられていく内に、俺はもう少しだけ活躍しようかと可変を解こうとした。

その時だった。俺の機体に敵のミサイルが直撃したのは。当たり前所はそこまで悪くなかったので機体は大破しなかったが、羽をやられたようだな、安定して飛べない。

俺はそのまま敵の真っ只中と言ってもおかしくはない所に運悪く着陸してしまった。

物陰に隠れて凌ごうとしたが、敵はどんどん俺に迫ってくる。

・・・もしかして・・・これが・・・俺の終わりなのか？

とそんな事が一瞬頭をよぎった時、迫ってくる敵のひよこが一匹、バズーカを撃たれて倒れた。

それを確認した時には、俺の無線にある声が響いてきた。

「よおルーキー。生きてるか？今からそこにいる敵さんをつぶしてやるよ。」

聞き慣れた声は、間違いなく隊長の声であった。

その無線を閉じ、隊長は宣言通りその場にいたひよこ三匹にゴリラ一匹を、瞬く間につぶしてしまった。

カスタマイズされているとは言え、MTとは思えない機動性と隊長の卓越した操縦技術は、もはやMTの枠を超えていると言っても過言ではなかった。

お得意のバズーカで敵を殲滅した後に、隊長が俺のところへとゆっくり歩いてきた。

手でも握れそうぐらいの距離で、隊長は俺にこう言ってきた。

「まったく、さっき俺が言ってやっただろ？あんまり手を出そうとするなつて。自分の分つてのをわきまえられねえと、長生きできねえぞ、ルーキー。」

その一言が、今の俺には悔しくてたまらなかった。だがそれと同時に、俺はいつもの事を思っていた。

ああ、俺じゃまだまだ隊長の背中は大きいな、と。

その後で、隊長が俺にある事を確認してきた。

「お、今連絡が入ったんだが、とりあえず敵さんは撃退しきったみたいだ。それじゃ、自分で動けるのなら、これから基地まで帰るぞ。」

そう言われて、俺は蝙蝠の調子を確認した。

肩翼がいかれているが、他は何一つ問題ない。これなら一人でも大丈夫だな。

それを踏まえて、俺は隊長に、

「はい。」

と簡潔に言った。

隊長は何も言わずに、黙って基地の方へと歩いていった。俺はその後を同じようについていった。

その時、敵の残骸の中から、こちらに狙いを定めているひよこが一匹いた。

そいつの機体から、こちらにわずかながら通信が聞こえた。

「せめて・・・一矢報いてやる!!」

突然の事に、俺は回避もできそうになかった。

だが、そのひよこの一矢は、こちらに飛ぶ事はなく、どこへとなく飛んでいった。

そう、そのひよこはベイルさんの機体のスナイパーライフルによって撃ち抜かれたのだ。

そして、そのひよこがもう動く事はなかった。

その後で、ベイルさんがこちらに通信をしてきた。

「さて、これで敵は完全に殲滅できたか。もう油断はするんじゃないぞ、イーグル。」

その通信に、隊長は申し訳なさそうな調子で返した。

「すまんすまん、最近勘が鈍っているんだ。勘弁してくれ。」

戦場での勘。隊長は片目を失ってからそれが衰えていつているらしい。

それでも今だに現役の実力はあるのだから、さすがは隊長である。

そんな事を思いながら、俺は腹の空腹の事も忘れて、ゆっくりと基地へと帰った。

### ミッション3 迎撃（後書き）

後書き

ふう、こういう形にも少し慣れてきました。澄田です。

幻想入りとはまったく言っていないほど赴きが違いますけど、それでもわしには問題ありませんよ。あ、これって二回目でしたっけ？

とりあえず、隊長の実力は何となくわかったと思います。他の人は・  
・まあ追々で。

これからもどんどん戦っていくと思いますので、そういった感じで  
ご期待ください。

ちなみに言っておきますけど、この話にギャグとかは要求しないで  
くださいね。

では、ミッション4をお楽しみに。

## おしらせ

お知らせ

これからの澄田の小説は、バクテリアではなく、澄田のアカウントで投稿させていただきます。

なので、こちらの方は事実上の凍結とさせていただきます。

あ、心配しなくても大丈夫ですよ？あくまでアカウントが変わる以上、そっちに移転しなければならないだけなので、これからも澄田の小説はしっかりと投稿していきます。

なので、質問や評価やレビューやお気に入り登録などは、そちらの方でお願いします。

お手数をおかけして、真に申し訳ございませんでした。 m (——) m  
これからのニュー澄田に、是非ともご期待ください (#^|^#)  
ps、少し時間がかかりますので、それまでお待ちくださいませ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7136n/>

---

アーマードコア 傷だらけの戦士

2010年10月29日13時15分発行